

安達洋祐 (編)
外科の「常識」
素朴な疑問 50

馬場秀夫
(熊本大学大学院教授・消化器外科学)

かねてから『臨床外科』(医学書院)誌上で連載中であった「外科の常識・非常識」がついに書籍として発刊された。ついに、と書いたのは、以前よりこの連載企画には興味があり、一度まとめて読んでみたいと思っていたからである。

本書はわが国の外科医が日常診療を行うにあたり、一般的に常識化(もしくは非常識化)している内容を、最新の知見を交えた上で改めて検討し、その真偽を問いつことに主眼を置いている。誌上掲載時には「人に聞けない素朴な疑問」というサブタイトルをもっていたが、もはや同僚外科医師の間では論議にならないほど当然のことになっている外科診療上の一種の決まりごとを今一度分析し、その「常識」にメスを入れているのである。おそらく私もそうであったように、ここで取り上げられている「常識」には、外科の新人研修医時代から先輩医師を通じて、臨床の現場で経験的に身につけてきたものが多数あり、外科医として一人前になる過程で必要不可欠な事項ともいえる。だからこそ、今さら「人には聞けない」という

ことなのだが、逆にある程度臨床経験が豊富になるとともに、時には本当にそうなのかとを感じる外科の慣行が含まれることも事実である。

そんな外科医の疑問に答えるべく、国内で活躍する27名の臨床医が各項目を執筆され、基本的な外科の常識に改めて正面から取り組まれている。内容をみると、「虫垂切除で断端埋没は必要か」、「胃腸切離断端の消毒は必要か」、「拔糸はなぜ7日目か」、「半抜糸は必要か」など基本的な概念がずらりと並んでいる。もちろん、一般外科医は「常識の範囲」でこれらに反射的な回答を用意できるわけだが、中には疑問を感じてもそれを隅に追いやってきたことに気づく方もいらっしゃるのではないだろうか。実は国内外科医のそうそうたるメンバーが同じような疑問を感じていたということにひそかな興奮を覚え、さらにそれに対し、執筆者らが豊富な経験と知識、かつ最新のエビデンスをもって解析を加えていく内容は、外科医として極めて興味深く、結論まで一気に読んでしまうことになる。今までの常識が真となるか偽となるか、

一つの疑問に対して簡潔にまとめられた3ページで外科医は十年來(数十十年來?)のパラダイムシフトを迎えることになり、新鮮な感動を覚えることが少なくないのである。また、番外編では外科医の直面する最近の問題が取り上げられ、本書をさらに魅力ある書に仕上げていく。

本書は、中堅以降の外科医、これから外科医の教育にあたる方々に柔軟な姿勢と広い視野で読んでいただきたい一冊である。と同時に、次代を担う若手外科医や研修医には、先輩医師の経験則を新たな視点で考え、一気に見直すチャンスを与えてくれる今までにない外科教科書ともいえる。また、外科の診療を知ってもらおうという意味では他科の医師や一般の方にも興味深い内容ではないだろうか。

もちろん、外科医が身につけた経験と慣習が重要であることには変わりはなく、それを素直に吸収し、外科のセオリーに徹する時期も必要である。一方で、やはり、時にはその惰性に流されず常に自分で「なぜか」と考え、検証する姿勢も併せ持たねばならない、そんなことに改めて気づかされる内容の深い一冊であり、若い研修医から指導者まで幅広い層にぜひとも読んでいただきたい外科医必携の書である。

●A5/頁216/2009年/定価3,150円
(本体3,000円+税5%)
[ISBN978-4-260-00767-2]
医学書院 刊